

清華簡『五紀』に見える黄帝・蚩尤伝承

―王権の由来と正当性―

湯浅 邦弘

序言

戦争神話には古代人の記憶が投影されている。世界の起源、善と悪の対立、民族や国家の創始、さらには王権の由来やその正当性などの残影である。

古代中国における最初にして最大の戦争は、黄帝と蚩尤しゆうの戦いである。初めて武器を作った蚩尤は、大暴風雨や濃霧も駆使して黄帝を苦戦に陥れる。黄帝は霧の中を自在に走る指南車を繰り出して形勢を挽回し、ようやく涿鹿たくろくの野に蚩尤を誅殺した。これにより、黄帝の世界制覇が実現し、黄帝は中華民族国家の始祖として讃えられることになった。一方、誅殺された蚩尤も、その卓越した軍事的才能により、中国の戦争神として祭られることになった。

本稿は、二〇二一年に新たに公開された清華大学蔵戦国竹簡（以下、「清華簡」と略称）の『五紀』に見える黄帝・蚩尤伝承について基礎的な考察

を加えるものである。

一 研究の背景と経緯

黄帝・蚩尤の戦いについては、神話研究や古文字学研究の観点から注目され、日本では森三樹三郎、白川静、御手洗勝、中国では袁珂などの諸氏によって、重厚な研究が蓄積されてきた。この戦いは一体何を意味するのか、黄帝・蚩尤それぞれの原像は何か、という点が追究されてきたのである。

しかしながら、そうした研究を前にしても、今ひとつ釈然としない印象が残っていた。その原因として考えられるのは、そもそも中国神話に整然とした体系性が認められないこと、資料が限られていて情報が断片的であること、それらの資料にもかなりの合理化・人間化が施されていること、どちらかと言えば黄帝の側に注目が集まっていること、戦争神話でありながら兵学思想研究からの考究がなされていないこと、などである。

そこで筆者は、拙著『中国古代軍事思想史の研究』（研文出版、一九九九年）の続編として、『戦いの神―中国古代兵学の展開―』（研文出版、二〇〇七年）を刊行し、その第一部でこの黄帝・蚩尤の戦いを取り上げた。その概要は以下の通りである。

まず改めて「黄帝・蚩尤の戦」の伝承を網羅的に整理し、その基本的構造、神話的要素、黄帝像、蚩尤像、戦乱の原因と武力行使、戦場、天人関係などの指標ごとに分類してみた。そこには、多くのバリエーションが見られた一方、そうした多様性を超えて「蚩尤作兵」すなわち蚩尤が武器を創作した、または蚩尤が戦争を興したという伝承の大枠は共通していた。

しかし、『呂氏春秋』蕩兵篇、『大戴礼記』用兵篇のみは、「蚩尤作兵」自体を否定し、蚩尤が黄帝に匹敵する高位の人（神）などではなく、単なる「庶人」とする点に大きな特色があった。さらに、馬王堆漢墓帛書『十六経』五正篇や正乱篇では、戦争神としての蚩尤に対する畏怖畏敬の念はほとんど見られず、蚩尤は天道の推移に従って黄帝に討伐されるべき叛逆者であり、人々への見せしめとして登場しているに過ぎないことが明らかになった。

これらの特異な蚩尤像は、黄帝・蚩尤伝承の単なる一異伝というのではなく、中国の戦争論、王の武力行使を正当化する思想、中国の文武観などから必然的に生み出された伝承であったと推測した。

その後、黄帝・蚩尤に関する比較的まとまった著作として、汪海波『蚩尤考証』（齐鲁書社、二〇一四年）が刊行された。しかし本書は、『史記』『山海経』など従来使用されてきた資料に基づいて蚩尤伝承を再編したのみで、そこに新たな見解が提示されているとは言えない。新出土文献として馬王堆漢墓帛書『十六経』正乱篇を紹介するものの、それは誅殺された蚩尤の死体が分解された点に注目するもので、「分尸」の一例としてあげられてい

るに過ぎない。筆者が追究したような、その意義や正乱篇の思想的特質については全く考察されていない。

このような状況の中、二〇二一年に『清華大学蔵戦国竹簡』の第十一分冊として刊行されたのが『五紀』である。ここに比較的まとまった黄帝・蚩尤伝承が認められた。

そこでまずは『五紀』の書誌情報を確認してみよう。

二 清華簡『五紀』について

清華簡『五紀』は、『清華大学蔵戦国竹簡（拾壹）』（中西書局、二〇二一年十一月）所収文献で、これまでその存在が知られていなかった古佚書である。同書の説明を基に概要を紹介すると以下のようなになる。

・竹簡は全百三十簡という膨大な分量で、各簡の簡長は約四十五センチ、幅は約〇・六センチ。三道編綫。

・文字は、毎簡三十五字前後が筆写されており、竹簡の下端に番号が認められる（一部欠損のため確認できない簡あり）。現存総文字数は四四七〇字である。

・先秦時代の佚書で、五紀（日、月、星、辰、歳）と礼、義、愛、仁、忠の五徳を軸に、天人体系を構成し、戦国時代の天人観念を展開している。「五紀」はこうした内容に基づく仮称で篇題は確認されなかった。



各竹簡下端の番号「一」～「十」

ここに若干の補足説明をしてみよう。まず、各竹簡の下端に番号が記されていたことから、古佚書であるにもかかわらず、竹簡を再排列する作業は比較的容易に進んだようである。また、竹簡の背面には、一部劃痕も認められるが、その状況も、この番号に基づく竹簡排列に疑問を呈するような点はない(注1)。

次に、竹簡に付けられた記号については特に説明されていないが、実は、重文号・合文号の他にも若干の「墨点」が確認される。ただその数は少なく、章・節の区切りや句読点として重視すべきほどの分量ではない。また、これらはそもそも原著にあったものなのか、それとも筆写者が便宜的に付け加えたものなのかも今のところ判然としない(注2)。

一例をあげると、第七号簡「黄帝乃具五犧五物」の「帝」の直後に墨点が付打されている。しかし、句読点の位置としては、必然性が感じられない。

墨点の例「黄帝乃五犧五物」



この『五紀』については、『文物』二〇二一年第九期に関連論文四本が収録されているほか、清華大学出土文献研究与保护中心ホームページ、復旦大学出土文献与古文字研究中心ホームページなどに論考が発表されている。

三 『五紀』の全体構造と黄帝・蚩尤伝承について

黄帝・蚩尤の伝承は、清華簡『五紀』の中でどのような位置を占めているのであろうか。まずは『五紀』の全体構造を把握するところから始めてみたい。『五紀』は全百三十簡、総文字数四四七〇字である。この分量をイ

メージする手がかりとして『老子』をあげてみよう。『老子』は「五千言」と言われる。つまり『五紀』は、分量的には『老子』に近い比較的まとまった文献である。

黄帝・蚩尤に関する伝承が記載されているのは、この内の第九十七号簡(第百十二号簡(积文一二四〜一二八頁)。すなわちこの文献の終盤に当たる)。

『五紀』の冒頭は、かつて世界に洪水が溢れ「天紀」が乱れたのを、「后帝」やその臣下の「四幹」「四輔」らが憂え、后帝が身を修め、五紀を正したことによって洪水が止み、世界が正常化したという説明に始まる(积文九〇頁)。

以下、原文の引用は、『清華大学蔵戦国竹簡(拾壹)』(中西書局、二〇二一年十一月)の积文に基づき、一部異体字などを現在の通行文字に置き換えた部分がある。それぞれの原文末尾の漢数字は积文の頁数である。重文号・合文号は省略し、それを反映した漢字を記す。それ以外の墨点は「■」の記号で示す。またそれぞれの原文の後の()内に筆者の理解に基づく訓読を掲げる。

なお、『清華大学蔵戦国竹簡(拾壹)』の积文が公開された後、清華大学出土文献読書会によって「清華簡第十一輯整理報告補正」が提示されている。以下本稿でこれに言及する場合には、「補正」と略称する。

唯昔方有洪、奮溢于上、……后帝、四幹、四輔、乃聳乃懼、稱攘以圖。

后帝靖己、修歴五紀、自日始、乃旬簡五紀、……有洪乃彌、五紀有常。

(九〇頁)

(唯れ昔方^ほ方に洪^{ほう}有り、上に奮溢^{ふんいつ}す。……后帝、四幹、四輔、乃ち聳^{おそ}れ乃ち懼^{おそ}れ、攘^{おそ}を称えて以て図る。后帝^{おのれ}己^{つひ}を靖^{つひ}しみ、五紀を修歴^{おそ}す

ること、日より始め、乃ち旬りて五紀を簡す。……洪有るも乃ち弥み、五紀常有り。(注3)

ここに登場する「后帝」とは、『詩経』魯頌・閟宮の「皇皇后帝」の鄭箋に「皇皇后帝、謂天也」とあるように、『詩経』では魯の郊祭の対象である「昊天上帝」のことである。ここでも、そうした上帝の意味で理解しておきたい。

その後は、后帝の言(「后曰」)として、天と人に関わる五紀・五事の内訳が語録のような体裁で説明されていく(九一〜一二三頁)。そこでは、「天の五紀」として「日月星辰歳」を挙げ、天地の物事をこの五紀に配当していく一方、「后之正民之徳」として「礼義愛仁忠」を挙げ、様々な人事をこの五つに配当する。また、世界の秩序が正されたことにより、「群神」が職位を得て不善を監督するようになり、「五穀六畜水火」が正しくめぐり、「庶人」が服し、「神鬼」が祭られ、「邦家」が建設され、「草木」が繁茂したとする。またそうした「天道」が存続すれば、天下の基準も違ふことはなくなるという。

后曰、日月星辰歳、唯天五紀。……后曰、一風、二雨、三寒、四暑、五大音、天下之時。(九一頁)

(后曰く、日月星辰歳は、唯れ天の五紀なり。……后曰く、一は風、二は雨、三は寒、四は暑、五は大音、天下の時なり。)(注4)

后曰、一日禮、二日義、三日愛、四日仁、五日忠、唯后之正民之徳。(九四頁)

(后曰く、一に曰く礼、二に曰く義、三に曰く愛、四に曰く仁、五に

曰く忠、唯れ後の正民の徳なり。)(注5)

后曰、作有上下、而昊昊皇皇、方圓光裕、正之以四方。羣神有位、司視不祥。……庶人以服、神鬼以享。樹設邦家、廟祧經遂、道載正郷。邦家既建、草木以爲英。(二〇五頁)

(后曰く、作めて上下有り、而して昊昊皇皇、方圓光裕、之を正すに四方を以てす。群神位有り、不祥を司視す。……庶人以て服し、神鬼以て享せらる。邦家を樹設し、廟祧經遂げられ、道は正郷を載す。邦家既に建ち、草木以て英爲り。)

天道之不改、永久以長、天下有徳、規矩不爽。(二〇六頁)

(天道の改まらざれば、永く久しくして以て長く、天下に徳有りて、規矩爽わず。)

さらに、后帝が世界の秩序をどのように定めていったのかについて説明が続く。その中で、人体の各部位が天体と関わりながら形成されていったこと(一一六頁)、各部位と徳目の関係(一二〇頁)、民の疾病と神鬼との関係(一二二〜一二三頁)、戦乱のはじめとその終息(一二四〜二二八頁)、およびそれを受けて、王が邦邑を武力制覇していく様子が説かれる(一二九〜一三〇頁)。

后事成成、萬生行象則之。天爲首、地與四荒與行、明星、顛頊、司盟爲脊、甲子之旬是司。……南尤右肩、東尤左肩、北尤左髀、西尤右髀。……(一一六頁)

(後の事成成り、万生行象之に則る。天は首と爲り、地と四荒、行、

明星、顛頊、司盟とは脊と為り、甲子の旬是れ司る。……南尤は右肩、東尤は左肩、北尤は左髀、西尤は右髀。……)

耳唯愛、目唯禮、鼻唯仁、口唯義。…… (一二〇頁)

(耳は唯れ愛、目は唯れ礼、鼻は唯れ仁、口は唯れ義なり。)

作有百崇、在人之出。……凡民有疾、自腰以上、是謂興疾、天鬼崇。

…… (一二二頁)

(作めて百崇有るは、人の出づるに在り。……凡そ民に疾有るに、腰より以上は、是れを興疾と謂い、天鬼の崇りなり。)

黃帝之身、溥有天下……黃帝有子曰蚩尤、蚩尤既長成人、乃作爲五兵。

…… (一二四頁)

(黃帝の身、溥く天下を有ち、始めて樹邦有り、始めて王公有り。)

夫是故凡侯王親自率師攻邦圉邑、展卜五犧五物、五器五物、五幣五物、五享五物于……攝威于四荒。(一二九頁)

(夫れ是の故に凡そ侯王親自ら師を率いて邦を攻め邑を囲み、五犧五物、五器五物、五幣五物、五享五物を展卜し……威を四荒に摂る。)

行之律、禮義愛仁忠、信善永正良明巧美、有力果、文惠武三德以敷天下。(一二〇頁)

(行の律は、礼義愛仁忠、信善永正良明巧美、有力果、文惠武の三德以て天下に敷く。)

よって、『五紀』における黃帝・蚩尤伝承は、現世の創成から政治的世界

の統一に至る過程の重要な契機として位置づけられている。蚩尤との戦いでの勝利を受けて、黃帝による世界制覇が成し遂げられ、最終的に「文」「恵」「武」の「三德」によって天下を統治したという文脈になっている。

なお、黃帝・蚩尤伝承の該当部は、第九十七号簡の「黃帝之身、溥有天下」から始まり、その直前までは、民の疾病に関する記述が見られる。そして、「黃帝之身」の直前には、「正列十乘又五」という意味不明の六字が記されている。

第九十七号簡「正列十乘又五黃帝之」



これについて積文の原注は、「函数の記載」または「前文までの節数」を総括したものと推測した上で、「待考」としている。やや不安は残るところではあるが、いずれにしても、ここで『五紀』が終了し、以降が別文献であるといった可能性は低いであろう。なぜなら、この文献の基調をなしている「后曰」という語録の形式はそれ以降にも見られ、また各竹簡下端の番号も連続しており、さらに筆跡も同一の筆写者によると考えられるからである。以下では、こうした前提のもとに、黃帝・蚩尤伝承の該当部分を解説してみたい。

四 『五紀』積読

以下、便宜上(1)～(4)の四節に区分し、【積文】【訓読】【現代語訳】を掲げる。【積文】は、『清華大学蔵戦国竹簡(拾壹)』(中西書局、二〇二一年十一月)の積文を基に、本稿末尾に掲げた【参考文献】の諸説および

私見により修訂を加え、最終的に確定した原文を掲げる。また、要注意の語句については、訓読の末尾に簡潔な語注を付す。語注で参考にした諸説についてはその執筆者名のみ記す。論考名・出典など詳細については【参考文献】をご覧ください。

【釈文】

(1) 黄帝之身、溥有天下、始有樹邦、始有王公。四荒、四尤、四柱、四維、羣祇、萬貌焉始相之。黄帝有子曰蚩尤、蚩尤既長成人、乃作爲五兵。五兵既成、既磨、既礪、既銳、乃爲長兵短兵、乃爲右營左營。變詣進退、乃爲號班。設錐爲合、號曰武散、設方爲常、號曰武壯、設圓爲謹、號曰陽先、將以征黄帝。逆氣乃彰、雲霓從將、□色長亢、五色紛紛、海霧大盲。百神皆懼曰、吁、非常。日月動、暈珥比、背瑠遭、次唯荒。

(2) 黄帝大恩、稱攘以圖、八襪端作。黄帝告祥、乃命四尤徇于左右上下陰陽。四尤曰、吁、蚩尤作兵、乃□□。黄帝乃命四尤、四尤戡之。四尤乃屬、四荒、四柱、四維、羣祇、萬貌皆屬、羣祥乃亡、百神則寧。

(3) 黄帝大憚、天則昭明。黄帝乃服鞭、陳兩參、傳五莛、乳礪武、焉左執黃鉞、右磨旒、呼□□□□□□□□日、時汝高畏、時汝畏溥、時汝四荒、磔針蚩尤、作遏五兵。肆越高畏、針征阻橫、圍汝水、桔乃準于方、武乃攝威。四荒□□□「張」、梟磬籥配將、天之五瑞廼上、世萬留常。肆號廼詣、大潰蚩尤、四荒乃愛。黄帝乃具五犧五物、五器五物、五幣五物、五享五物、以賓于六合。其犧之脂、是爲威瑞、其丹帛之幣、是爲梟瑞、世萬以爲常。

(4) 黄帝乃命萬貌焉始祀高畏、畏溥、四荒、焉始配帝身。黄帝焉始又祝、

首曰時。黄帝既殺蚩尤、乃饗蚩尤之身、焉始爲五芒。以其髮爲韭、以其眉鬚爲蒿、以其目爲菊、以其鼻爲蔥、以其口爲藟、以其腋毛爲茨、以其從爲芹、以其骸爲干侯爰、以其臂爲橐椀、以其胸爲鼓、以其耳爲照箴。凡其身爲天畏忌、凡其志爲天下喜。

【訓読】

(1) 黄帝の身、溥く天下を有ち、始めて樹邦有り、始めて王公有り。四荒、四尤、四柱、四維、群祇、万貌焉に始めて之に相たり。黄帝に子有り蚩尤と曰う。蚩尤既に長じて成人し、乃ち五兵を作爲せんとす。五兵既に成り、既に磨き、既に礪ぎ、既に鋭くし、乃ち長兵短兵爲り、乃ち右營左營爲り。變じて進退を詣し、乃ち号班を爲す。錐を設けて合と爲し、号して武散と曰い、方を設けて常と爲し、号して武壯と曰い、円を設けて謹と爲し、号して陽先と曰い、將に以て黄帝を征たんとす。逆氣乃ち彰れ、雲霓従い將り、□色長亢、五色紛紛として、海霧大いに盲し。百神皆懼れて曰く、吁、非常。日月動き、暈珥比び、背瑠遭い、次唯だ荒る。

・四尤……四仲(正)(黄徳寛・馬楠)、四方(賈連翔)、四介(鄔可晶)、四堪(張雨絲・林而鵬)など諸説がある。いずれにしても、四荒、四柱などと同様、黄帝の輔臣の名であろう。

・萬貌……原注は第二号簡く第三号簡の「天地、神祇、萬貌」について、「万貌」は「万民、万人」の意であるとするが、伝世文献にはそうした用例は見えない。確かに、直前に「天地」とあるので、「天地人」という連想で「万民、万人」とする理解も良さそうではあるが、『五紀』全体、特にこの黄帝・蚩尤伝承の部分に登場する「萬貌」との整合性も考慮す

る必要がある。ここでは、「萬貌」は他の臣下と併記されており、黄
帝の「相」となったとされている。民とする理解も否定はできないが、
ここでは他の輔臣と並ぶような存在としておきたい。

・右營左營……「補正」は「右轅左轅」に読み、左右の車隊の意とする。
また別解として「右旋左旋」とし、指揮車の意とする。

・變詣進退……「補正」は二字ずつで対をなすとし、「變稽（止）・進退」
と読む。

・雲霓從將……「補正」は「從」は疾速の意、「將」は盛んの貌であるとし
る。

・海霧……王寧は「晦霧」に読む。

(2) 黄帝大いに愬て、攘を称えて以て図り、八襜端作す。黄帝告祥し、
乃ち四尤に命じて左右上下陰陽に徇わしむ。四尤曰く、吁、蚩尤作兵し、
乃ち□□。黄帝乃ち四尤に命じて之に戡たしめんとす。四尤乃ち属し、四荒、
四柱、四維、群祇、万貌皆属し、群祥乃ち亡び、百神則ち寧んず。

・黄帝乃命四尤、四尤戡之。四尤乃属、四荒、四柱、四維、羣祇、萬貌皆
屬、羣祥乃亡、百神則寧。……「補正」は句点の位置を修正し、「黄帝
乃命四尤、四尤戡之。四尤乃属四荒、四柱、四維。羣祇萬貌皆属、羣祥
乃亡、百神則寧」と読む。その場合は、黄帝に仕える臣下（諸神）たち
は全くの同格ではなく、「四尤」がやや上位にあって、「四荒、四柱、四
維」などを指揮したという関係になる。

(3) 黄帝大いに懼び、天則ち昭明たり。黄帝乃ち服鞭し、陳すること

兩參、五芘に伝え、礪武を刳ち、焉に左に黄鉞を執り、右に麾旒し、
呼□□□□□□曰く、時れ汝高畏、時れ汝畏薄、時れ汝四荒、蚩尤を磔針
し、五兵を遏むるを作せ。肆越なる高畏、針征して横を阻み、汝の水を
圍（禁）じ、楛して乃ち方に準え、武して乃ち攝威す。四荒□□□「張」、梟
の磬籥將に配し、天の五瑞、迺ち上り、世万いに常を留む。肆なり号し
て迺ち詣り、大いに蚩尤を潰り、四荒乃ち愛れむ。黄帝乃ち五犧五物、
五器五物、五幣五物、五享五物を具え、以て六合に賓う。其の犧の脂、
是れを威瑞と為し、其の丹の帛幣、是れを梟瑞と為し、世万いに以て常と
為す。

・黄帝大懼……「補正」は、「黄帝大囂」または「黄帝大噉」の意とする。

その場合は、黄帝が大いに叫んだという意味になる。

・陳兩參、傳五芘、刳礪武……王寧は、このの文字と句読を「陳兩參專伍、
洒肅礪武」に変え、「兩、參、專、伍」はいずれも陣の名、「洒肅礪武」
は厳格な軍隊訓練の意とする。「補正」も「參」を「驂」と読んだ上で、
「兩驂」「五芘」は陣名とする。また、「補正」は、「刳礪武」の「刳」
は副詞で「篤」の意であるとする。

・磔針蚩尤……原文「」について、釈文は郭店楚簡『語叢』に「出言有
」とあり、裘錫圭が「針」の初字であると紹介しつつも、こ
こでは「撼」に読むとする。王寧は、「次」「資」と読み、「庶」の意で
あるとし、蚩尤を蔑視する表現であるとする。



「磔針蚩尤」

・針征阻横、圍汝水、楛乃準于方、武乃攝威……王寧は「阻横」を「祖黃」と読み、黄帝を表しているとするが、黄帝をどのように称する例はない。また王寧は、「圍汝水楛、乃準于方」と断句し、汝の水楛（公正・正直）を圍（堅守）し、四方の標準になる、の意であるとする。蚩尤が霧や暴風雨によって黄帝を苦しめたという伝承があるので、この「水」もそれを表している可能性が高い。

・四荒□□□「張」、梟磬籥配將……「補正」は、句点の位置を「四荒□□□張梟、磬籥配將」と修正し、この方が韻に合致すると説く。なお、「梟氏」は『周礼』の官名で音学を司る。竹簡の欠損があつて判然としないが、軍楽または軍陣に関する楽器を意味している可能性がある。

・肆號廼詣……鄔可晶は「肆號」は「號」の誤写とし、黄帝の子「號」が参戦したことを表すとす。確かに、「號」については、『山海經』大荒東經に「黄帝生禺號」とあり、「人面鳥身」の東海の神とされる。しかし、『五紀』が蚩尤についてわざわざ「黄帝有子曰蚩尤」と説明し、「號」の説明を全くしていないことからすれば、やや唐突な理解である。

・大潰蚩尤……王鵬遠は「大潰蚩尤」とし、上天が大いに蚩尤を遺棄したの意であるとする。しかし、ここでは、黄帝の臣下たちの武力によって蚩尤を打破したとされており、またそもそも蚩尤と上天との関係についてはそれまで全く触れられていないので、上天が蚩尤を見放したというのはやや唐突な理解である。

(4) 黄帝乃ち万貌に命じて焉に始めて高畏、畏溥、四荒を祀り、焉に始めて帝の身に配す。黄帝焉に始めて又祝し、首めて曰く時なり。黄帝既に蚩尤を殺し、乃ち蚩尤の身を饗し、焉に始めて五芒と為す。其の髪を以て韭と為し、其の眉鬚を以て蒿と為し、其の目を以て菊と為し、其の鼻

を以て葱と為し、其の口を以て藟と為し、其の腋毛を以て茨と為し、其の従を以て芹と為し、其の骸を以て干侯爰と為し、其の臂を以て囊桴と為し、其の胸を以て鼓と為し、其の耳を以て照筭と為す。凡そ其の身は天の畏忌と為り、凡そ其の志は天下の喜びと為る。

・高畏、畏溥……劉釗・李聰は「高威」（天の高遠）、「威溥」（地の広大）の意であるとし、天の威については、『尚書』の君奭や大誥の例を指摘する。

・五芒……「芒」は草の葉や穀物の先端の細い毛。劉釗・李聰は『黄帝内經靈樞』五味に見える「五菜」との関連を指摘する。

・以其腋毛爲茨……「補正」は、「茨」は「雨衣」「蓑」の意であるとする。以其従爲芹……「補正」は、「従」を「蹤」と読み、脚趾の意であるとする。また、「芹」を「爨」と読み、「柴草」「薪」の意であるとする。この前後は身体の部位について論じているので、「従」が脚の意であることはほぼ確実であろう。

・以其耳爲照筭……「補正」は「照筭」を「籠網」の意であるとし、その形状が「両耳」に類似すると指摘する。

・凡其身爲天畏忌、凡其志爲天下喜……文意未詳であるが、古佚書『龍魚河図』では、黄帝が蚩尤を誅伐した後も天下の騷擾は収まらず、苦悩した黄帝は、蚩尤の形象を描いて天下に示威し、人々は蚩尤がまだ死んでいないと畏怖して、ようやく天下は平定されたと説く。「蚩尤没するの後、天下復び擾乱して寧からず。黄帝遂に蚩尤の形象を画きて、以て天下を威し、天下咸蚩尤死せずと謂い、八方万邦皆為に伏す」(『太平御覽』卷七九引く)。これは、蚩尤に対する畏怖畏敬の念を黄帝が逆に利用したという描写であると考えられる。また、馬王堆漢墓帛書『十六經』正

乱篇では、黄帝による見せしめの内容が詳述される。蚩尤の皮膚・毛髪・胃袋・骨肉などに分けて執拗に記され、しかも人々は見せしめにされた蚩尤の皮膚を的として矢を射、その胃袋で作った鞣を蹴ることなどを要求される。すなわち、黄帝による蚩尤の処罰は、見せしめの要素に、さらに踏絵的要素を加えているのである。この『五紀』の記述も、解体された蚩尤が天下の人々の戒めになり、またその画像が蚩尤への情念を維持させたという意味であるかと推測される。

【現代語訳】

(1) 黄帝は自らあまねく天下を保有し、初めて邦を建て、王公となった。四荒、四尤、四柱、四維、群祇、万貌らがここにおいて初めてこれを補佐した。黄帝に蚩尤という子があつた。蚩尤は成長して大人になると、五兵を作ろうとした。五兵を作ると、さらに磨き研ぎ鋭くし、それらが長兵・短兵となり、右營・左營となった。また変じて進退させ、それを号班と呼んだ。錐形の陣を設けて合とし、それを武散と呼び、方形の陣を設けて常とし、それを武壯と呼び、円形の陣を設けて謹とし、それを陽先と呼び、それらによって黄帝を討とうとした。異常な気が現れ、雲と霞がおこり、□色長亢、五色の気が入り乱れ、海霧で辺りが暗くなった。神々はみな恐れて言った、「ああ、異常事態だ」。太陽と月が乱れ動き、太陽の暈と珥のかさが同時に現れ、太陽の背（日に背いて生ずる暈気）と璫の気（暈気の中で帯鉤状の気）が交差し、天体の秩序はひたすら乱れた。

(2) 黄帝は大いに慌て、蚩尤を攘おうと考え、八襪の祭祀を挙行した。黄帝は告祥し、それから左右上下陰陽に従うよう四尤に命じた。四尤は言

った、「ああ、蚩尤が作兵し、乃□□」。そこで黄帝は蚩尤を討つよう四尤に命じた。四尤が従い、四荒、四柱、四維、群祇、万貌もみな従って、異常現象が消えたので、百神は安堵した。

(3) 黄帝は大いに喜び、天はすぐに明るくなった。黄帝はそこで鞭を執り、陳を張ること再三、五莛に伝えて戦争の準備をさせ、ここに左手に黄鉞を持ち、右手に麾旗を掲げ、呼□□□□□□□□□□言った、「高畏よ、畏溥よ、四荒よ、蚩尤を磔にして刺し、五兵を止めよ」。卓越した高畏が突進して蚩尤の横暴を阻み、蚩尤の水を止め、蚩尤をしばりつけて、的のようにし、武力で威嚇した。四荒□□□□「張」、鳧の磬籥を諸將に配った。天の五瑞がたちまち上り、世はすべて常態に復した。連なり呼号して至り、大いに蚩尤を殺した。四荒はそれを哀れんだ。そこで黄帝は五犧五物、五器五物、五幣五物、五享五物を具え、以て六合（世界）に敬った。捧げられた蚩尤の脂を威瑞とし、その赤色の布を鳧瑞とし、世はすべて常態となった。

(4) 黄帝はそこで万貌に命じて初めて高畏、畏溥、四荒を末永く祀ることとし、ここに初めて帝の身に配享させることとした。黄帝はここに初めて治め祝い、初めて時（我が世）だと言った。黄帝は蚩尤を殺した後、蚩尤の身を供え、はじめて五芒とした。その髪を韭とし、その眉と鬚を蒿とし、その目を菊とし、その鼻を葱とし、その口を藟（草の名）とし、その腋毛を茨とし、其の脚を芹とし、その骸を干侯爰とし、その臂を囊桴（浮き袋）とし、その胸を鼓とし、その耳を照籛（灯籠）とした。蚩尤の身はすべて天からの畏忌（恐れ忌むもの）となり、その志（記録・画像）は天下の喜びとなった。

五 清華簡『五紀』に見える黄帝・蚩尤伝承の特色

こうした理解を基に、次に、『五紀』における黄帝・蚩尤伝承の特色を探ってみよう。便宜上、十の観点に分けて論述する。

第一に、「黄帝・蚩尤の戦」の基本的構造はどうであろうか。この戦いは、黄帝による世界統治確立の過程として描かれている。清華簡『五紀』は、「五紀」によって宇宙の原理を説きはじめ、この終盤に至って、人間の疾病や兵乱の発生原因について説明し、その中で、黄帝が今の世の基礎を蚩尤との戦いに勝利したことによって確立したと説明する。

伝世文献におけるこの伝承の基本構造について附言すると、例えば『山海経』大荒北経では、地理の解説や旱魃起源譚に包摂されていて、黄帝・蚩尤の戦い自体が主題ではない。これに対して、古佚書『龍魚河図』では、黄帝の世界統一に至る重大事件とし、『史記』五帝本紀では、神農から黄帝に至る古代聖王の中国統一過程として描かれ、黄帝・蚩尤の戦の前に、炎帝・黄帝の戦があったとされる。

従って、『五紀』の基本構造は『龍魚河図』や『史記』に近いとも言えるが、『史記』のように他の古代聖王は登場せず、黄帝のみが重視されている印象が強い。

第二に、その黄帝の描写はどうであろうか。ここで黄帝は、初めて世界全体を保有し、邦を建て王号を称した人物として描かれる。『五紀』冒頭に登場し、以後、「后曰く」としてその言葉が引用される。「后帝」が天神であるとすれば、黄帝は初の人王と理解される。蚩尤との戦いにおいても補佐（諸神）の助力によって勝利したとされ、黄帝自身の超人的能力は描かれていない。神か人かの区別は難しいが、黄帝に関してはあくまで人間界の王とされているように思われる。

第三に、これに対して、蚩尤の描写はどうであろうか。伝世文献では「半人半獸」の異形神として描かれることもあった。ここで蚩尤は、「五兵」を作り黄帝に反旗を翻したため、黄帝軍に征伐された人物として描かれている。「蚩尤作兵」という基本的な枠は保持されながらも、他の伝承に見られるような蚩尤の驚異的な軍事的才能という点はそれほど強調されていない。また「神」や「獸」を想起させるような記述も見られない。

第四として、それに関連する特徴的な点をあげるとすれば、黄帝と蚩尤の関係であろう。『五紀』では両者が親子であったとされている。この点は、「黄帝に子有り蚩尤と曰う」という記載から明らかである。従来の関係資料では両者を親子とするものはほとんどなかった。伝世文献では、蚩尤の悪逆性を強調するためか、悪神、炎帝の末裔、黄帝の臣下、諸侯、他部族の長などとするものが多い。従来の研究では、こうした関係を前提に、この戦争を、善神と悪神との対立、君臣関係における反乱と鎮圧、部族間抗争などと捉えてきたが、『五紀』ではその前提がそもそも異なっていると見える。これはその思想的意味を追究すべき大きな特色である。

では、第五として、文献全体の神話性という点はどうであろうか。『五紀』は、「五紀」と「五徳」を軸に天と人を説明するが、そもそも宇宙がどのようになされたのか、人類はどのように誕生したのかについては説いていない。つまり、宇宙創造神話、人類誕生神話とはなっていないのである。また先に指摘した通り、黄帝・蚩尤とも、神や獸としては描かれてはいない。

但し、蚩尤の興軍に際して異常現象が生じたので黄帝が祭祀をしてその現象が収まったとされるなど、神秘的とも言える要素はある。蚩尤についても、他の伝世文献に描かれるような「半人半獸」的要素はないが、「作兵」によって天の異常現象を起こすなどの超人的要素が見られる。黄帝に従う部下たちについては、それ以前の段落では「后帝」に従う諸「神」とされ

ており、「四荒」「四柱」「四維」など、その名称も世界の枠組みを表すようなものとなっている。しかし、『五紀』終盤に記載されるこの戦いについては、その神話性は稀薄であるように思われる。

このことを、黄帝・蚩尤およびそれぞれの臣下・従者・協力者の性格という観点から補足してみよう。

まず、伝世文献において「黄帝・蚩尤の戦」を描く代表的な資料に『山海経』がある。ここでは、蚩尤が「風伯」「雨師」の助力を得て大暴風雨を起こしたとされている。つまり風の神や雨の神が蚩尤に協力し、風雨や濃霧を起こしたわけである。一方、苦戦に陥った黄帝は、「応龍」「女魃」の加勢を得たとされる。雨風を鎮める龍や女神の協力があったのである。余談ではあるが、この伝承は、雨を鎮めたこの「女魃」の効果があまりすぎて世界が干上がってしまったという旱魃起源譚ともなっている。

次に、古佚書『龍魚河図』によると、蚩尤には兄弟が八十一人いて、みな「獸身人語」で「銅頭鉄額」であったという。苦戦した黄帝は、天が降した「玄女」から戦術を伝授され形勢を挽回したとされる。濃厚な神話的要素があると言えよう。

ところが、『史記』五帝本紀では、蚩尤の臣下や協力者は見えず、黄帝には「諸侯」が従ったとされている。司馬遷の時代には、すでに神話的要素は希薄となり、人間世界の戦いとして描かれているように見える。

また、拙著『戦いの神』で考察した馬王堆漢墓帛書『十六経』では、単独で登場する蚩尤に対して、五正篇では黄帝の臣下「闡冉」、正乱篇では同じく臣下の「力墨」などが重要な役割を果たしている。そして、天道の推移に従って人事（興軍）の可能性が増減するという独特の天道観に従って、黄帝は、言わば予定調和的に蚩尤を誅伐したのである。

これらに対して、『清華簡』五紀』では、黄帝については、第（1）節・

第（2）節では、四荒、四尤、四柱、四維、群祇、万貌などが従い、第（3）節でも、高畏、畏溥、四荒、第（4）節でも、万貌、高畏、畏溥、四荒が登場している。しかも、蚩尤との戦いに際して、黄帝は祭祀を行い指示を出すものの、実際の戦闘行動をするのはこれらの部下たちである。一方、蚩尤は武器を作り、陣営を組織したとされているので、集団を指揮していたと思われるが、具体的な臣下や従者などの名は見えない。

以上の説明を図1にまとめておこう。

【図1】黄帝・蚩尤とその従者（臣下・協力者）との関係

『山海経』 黄帝―応龍、女魃（暴風雨を鎮める）

蚩尤―風伯、雨師（暴風雨や濃霧を発生させる）

『龍魚河図』 黄帝―天が降した玄女

蚩尤―兄弟八十一人（みな獸身人語、銅頭鉄額）

『史記』五帝本紀 黄帝―諸侯

蚩尤―×

『十六経』五正篇 黄帝―闡冉

蚩尤―×

『十六経』正乱篇 黄帝―力墨、高陽（太子）

蚩尤―×

『五紀』(1) 黄帝—四荒、四尤、四柱、四維、群祇、万貌

蚩尤—×

『五紀』(2) 黄帝—四尤、四荒、四柱、四維、群祇、万貌

蚩尤—×

『五紀』(3) 黄帝—(五荒?)、高畏、畏溥、四荒

蚩尤—×

『五紀』(4) 黄帝—万貌、高畏、畏溥、四荒

蚩尤—×

続いて第六として、戦乱の原因と武力行使について考えてみよう。この戦いでは、そもそも蚩尤が「五兵」を作り黄帝を討とうとしたとされる。黄帝は祭祀を経た後、多くの部下の助力によって勝利し、蚩尤を殺した。開戦の原因が蚩尤側にあるという点は、他の伝世資料とも合致する。受け身に回った黄帝の正当防衛であるような印象を与えている。

次に第七として、「作兵」の意味はどうか。これについては伝世文献でも微妙な相違があった。この『五紀』でも、武器を作るという意味と、その武器を精銳にして陣營を作るという意味が重ねられているように思われる。ただいずれにしても、「蚩尤作兵」が著名な伝承であったことを反映しているであろう。また伝世文献の中には、この「五兵」を五種の武器とした上で、その内訳を説明するものもあったが、ここでは「五兵」の具体的な内訳は説かれていない。

第八に、戦場について確認しよう。この清華簡『五紀』では、戦いに関する地名は記されていない。『山海経』では「冀州」、「史記」『莊子』などでは「涿鹿」などが戦場とされていた。これらを現在の地図上で特定することは難しいが、いずれにしても、黄河流域、中国の北方地帯が前提にな

っていたと思われる。しかし『五紀』のような「楚簡」に記載されていたことからして、戦国時代中期にはこの伝承が南方にも伝播していたと推測される。

なお、上博楚簡第五分冊所収『融師有成氏』にも、断簡ながら「蚩尤作兵」の語が見える。伝世資料でも、蚩尤と苗族との関係を説くものがあり、南方との関わりは一部考慮されていたが、これら楚簡の発見によって、この伝承の南方への伝播が確認されたと言えよう。

第九として、天人関係はどうであろうか。「蚩尤作兵」により天に異常現象が生じて「百神」が恐れ、黄帝が天に祈り、臣下たちが従属を表明したことにより異常現象が消えて「百神」が安堵するなどの天人相関関係が見られる。またそもそもこの文献が、后帝(上帝)の言によって構成されている点も、間接的ながら天人相関思想の表れだと言える。但し、「五紀」「五徳」で天と人を説明しながらも、それを五行(木火土金水)と関連付けたり、五要素の循環を説いたりはないので、陰陽五行説を強く反映しているとは言えない。また、五紀のあり方に反した場合に天罰が下るなどの時令説や災異説的要素も見られない。濃厚な天人相関思想が説かれているとまでは言えないであろう。

ただ『五紀』全体に視野を広げると、そうした思想に連なるような重要な言葉も確認される。例えば、次の一節には、「五行」「四時」「陰陽」への言及が見られる。

・唯皇上帝、降爲民式、建設五行、四時は備(一一二頁)

(唯れ皇上帝、降りて民の式と爲り、五行を建設し、四時はれ備わる。)

・夫七次設敷、而周盈陰陽、……轉還無止、一陰一陽(一一二頁)

(夫れ七次設敷して、陰陽を周盈し、……転じ還りて止む無く、一陰

一陽たり。)

また、素朴な天譴思想と見られる要素もある。

・民之不敬、神祇弗良。……天地疾愠、神見禍孽、過而弗改、天之所罰

(二二三頁)

(民の敬せざるや、神祇良からずとす。……天地疾しく愠り、神禍孽を見すに、過ちて改めざれば、天の罰する所となる。)(注6)

民の「不敬」に神は不快感を抱いて災禍を示す。それにも関わらず民がその過ちを改めなければ天罰が降るといふ。

いずれも素朴な段階にはあるが、こうした思想が後の陰陽五行説(相生・相克)や、『呂氏春秋』『礼記』などに見られるような時令説、董仲舒の災異説などにヒントを与えたという可能性は考えられる。

最後に十番目として、戦後処理の問題を取り上げてみよう。伝世文献では、誅殺された蚩尤の死体が解体されたとするものがあつた。蚩尤の墓所に関する伝説が散在しているのも、こうした伝承と関わりがあろう。

清華簡『五紀』でも、蚩尤の亡骸は解体され、身体の各部位が植物や器具になったとされている。この点は、中国(漢族)神話に特徴的なもので、盤古の死体化生伝承にも見られる。『述異記』によれば、原初の混沌の中から天地が生じ、天地は陰陽に感じて盤古という巨人を生み、その盤古が死ぬと死体が様々なものに化して天地間に万物が備わるようになった。盤古の息は風雪に、声は雷に、左眼は太陽に、右目は月に、手足と体は山々に、血潮は川に、肉は土に、髪の毛や髭は星に、体毛は草木に、齒と骨は金石に、汗は雨になったという。『五紀』において、死後の蚩尤に関して、こう

した詳細が記されるのも、単に反逆者を見せしめにするというだけではなく、万物誕生譚の意識が背景にあるためではないかと推測される。

六 黄帝・蚩尤伝承の思想的特色

多くの観点から清華簡『五紀』の特徴について論じてきたが、最後に本章では、それらを集約しつつ、最も重要な思想的特質について検討してみよう。

まず最大の特徴と言えるのは、黄帝と蚩尤が親子とされていることである。蚩尤は父に戦いを挑み、黄帝は我が子を誅殺したのである。この伝承の背景には、親子の相克、子による親への反逆、親による子殺し、という神話伝承の普遍的なモチーフがある。

伝世文献で、黄帝・蚩尤を親子とするものはほとんどないと述べたが、実は、釈文の原注が指摘するとおり、『史記』の中に一箇所そうした記述が認められる。『史記』建元以来侯者年表に次のようにある。

以故高廟寢郎上書諫孝武曰、子弄父兵、罪當笞。父子之怒、自古有之。

蚩尤畔父、黄帝涉江。

(故の高廟の寢郎を以て上書して孝武を諫めて曰く、子、父の兵を弄し、罪は笞に当たる。父子の怒りは、古より之有り。蚩尤父に畔き、黄帝江を渉る。)

これについて原注は何も解説していないが、もと高祖の寢廟の官であつた田千秋(車千秋)が武帝に上書して諫めた言葉である。この記述は、武帝末期に太子の劉拠が興した巫蠱の禍に際して、田千秋が、劉拠には反

乱の意志はないと武帝に諫めた出来事を踏まえている。親子間の感情のもつれは古くからあり、かつて蚩尤が父に背き、黄帝が討伐のため渡河せざるを得なかったのはその事例だとし、そのような惨劇を繰り返さないよう慎重な行動を求めたのである。ここでは、武帝と太子との親子関係を、黄帝・蚩尤の関係になぞらえているので、黄帝と蚩尤とが親子であったというところが前提となっている。

これは、『史記』五帝本紀の記述と異なるので、『史記』内資料の不整合であると考えられるが、従来あまり注目されてこなかった。『史記』三家注、梁玉繩『史記志疑』、中井履軒『史記雕題』、滝川君山『史記會注考證』など代表的な『史記』研究書にもまったく指摘がない。それは、この建元以来侯者年表自体が司馬遷の撰ではないとされていたことと関わりがあろう。五帝本紀の記述が司馬遷本来のもので、この表との間に齟齬があったとしても特に注視されなかったのである。

しかし、問題は、司馬遷の自撰であるか否かということではない。清華簡『五紀』の発見により、古くから黄帝・蚩尤を親子だとする異伝があり、この年表の田千秋の言はそうした古伝承を基にしていたという可能性が浮上してきたのである。

黄帝と蚩尤が親子であったとすれば、この戦争伝承は、建元以来侯者年表が指摘する通り、子が親に反逆し、父がそれを討つという「父子の怒り」の起源譚ともなる。

ではなぜ、こうした伝承はその後見られなくなったのであろうか。それは、こうした近親憎悪的故事がその後の中国世界の中では強く求められなくなつたからであろう。この伝承は、田千秋の諫言のように反面教師として使用することはできても、その後の儒教的世界では受容しがたいものとなる。親子の情愛を基にする「孝」の思想にはふさわしくないのである。

そこで、黄帝と蚩尤は血縁関係にはなく、蚩尤を炎帝の子、黄帝の臣下、古天子、諸侯、他部族の長などとする伝承が主流になって、この系統の伝承は亡んでいったのではないかと推測される。

従って、清華簡『五紀』は世界の創成を「五紀」のキーワードによって整然と説く文献であるが、一方で、黄帝・蚩尤伝承自体については、儒教道徳で覆われる前の比較的素朴な観念を基盤にしているとも考えられる。

次に第二の思想的特色として、王権の起源とその正当性に関する問題を取り上げてみよう。

この文献では、黄帝の王権がその武勳によって得られたと読み取れる。すなわち蚩尤を討伐したという軍事的勝利が王権の正当性を保証しているのである。また、その武勳が黄帝個人ではなく、多くの臣下たちを含む集団の力によって成し遂げられている点も特色である。そして、それ以外の理屈は特に加えられていない。天命であるとか、天道による必然性であるなどの説明は見られないのである。つまり、この伝承は、儒教的な天命思想や黄老思想的な天道思想が確立する前の古い形態であると推測される。

ただ、黄帝・蚩尤伝承が『五紀』の文脈では、「后帝」を起源とする世界形成過程の重要な事件として説明されており、黄帝に助力した多くの臣下たちは、それ以前の段落では諸神として描かれている。つまり、受命思想ほど明確なものではないが、黄帝の権威は天神の付託や支援を間接的に受けたものであるという意識を読み取ることもできる。また、集団の力による勝利という社会性を帯びているので、突出した個人の武功による素朴な神話形態ではないことも分かる。

こうした『五紀』の思想的位を、図2「英雄型神話の発展段階モデル」として図解してみよう。

【図2】英雄型神話の発展段階モデル

突出した個人の武力による勝利

←

集団の力による勝利（社会性） 親子相克型↓君臣対立型↓部族または国家抗争型

←

受命または天道による王権獲得（理論的）

まず、素朴な神話では、突出した武勇を持った英雄が敵に勝利する。すなわち個人の圧倒的な武勇と勝利そのものが王権を支えているのである。

ただ、実際の社会においては集団・組織の力が求められる。そこで次の発展段階として、集団による勝利という神話伝承が成立する。すなわち社会性を帯びた王権の説明である。ただ同じく社会性と言っても、そこにはいくつかのバリエーションが見られ、まずは親子の相克、次に君臣の対立、そして部族または国家間の抗争である。この順番通りに整然と神話伝承が発展していったというわけではないが、親子は相克の生ずる最も素朴で普遍的な関係であり、次が君臣、そして国家間、という段階になる。

さらに次の段階になると、儒教的な天命や、黄老思想的な天道が持ち出される。王権の由来と正当性は、より強固に理論化される。

これらはいくまでモデルであるが、清華簡『五紀』に見られる黄帝・蚩尤の伝承は、この内の社会性を帯びた親子相克型に位置づけることができよう。素朴な神話からは脱しているが、天命や天道による理論化はされていない。そのような段階である。

なお、獲得した王権がどのように次世代に継承されるのか。例えば、世

襲なのか、禪讓なのかなどについての説明はない。これは清華簡『五紀』の主題が世界の創成から王権の確立までであり、そうした問題は念頭になかったからであろう。その点を主題としている新出土文献としては、郭店楚簡『唐虞之道』や北京大学藏漢簡『周馴』などがあげられる（注7）。

これに関連して、第三に、武力行使の正当性について考えてみよう。

『五紀』では、武器を作り戦争を興したのは蚩尤であり、それによって世界の秩序が乱れたとされている。黄帝はその秩序回復のために止むなく蚩尤を討伐したという正当化が図られている。しかも、蚩尤を討伐した後、親征して世界全体（邦邑）を武力制覇していったとされており、権力者による武力行使が蚩尤討伐を契機として全面的に正当化されていることも分かる。

さらに、最終的には、「文」「恵」「武」の「三徳」を広めて天下を統治したと結論づけられている。これは、「武」が「文」の低位に滑り込むことでその意義を保証されるという中国的文武論の先駆けにもなっているであろう（注8）。このことを図3「中国的文武観の展開モデル」として図解してみよう。

まず歴史の実態としては、集団同士の武力衝突があり、勝利した方のリーダーが王権を獲得する。いわゆる「勝てば官軍」である。ただ軍事力を背景としたむき出しの王権には脆弱性もある。その正当性を理論的に説明できず、より強大な軍事力を持つ他者によって簡単に王権を奪われてしまうからである。また、それでは武力闘争が限りなく続き、平和で安定した時代が訪れない。

そこで春秋戦国時代に活動した諸子百家の内、儒家は、ここに「文」「武」という概念を持ちだして、「文」の優位性を主張した。有徳の王者は実際の武力を発動するまでもなく、他者はその文徳に感化されて帰服してくると

説くのである。孟子に顕著な王道政治の思想である。

しかし、戦国時代の戦乱は、こうした儒家の理想を入れることはなかった。実際には激しい闘争が繰り返されていったのである。そこで『司馬法』は、兵学思想の立場から新たな文武観を提唱する。儒家が価値を低いとして退けた「武」も「文」と同格の意義を持ち、両者は表裏一体の関係で併存するというのである。「文」か「武」かという二者択一ではなく、そもそも二つの原理を併存させ、状況に応じて使い分けるべきだと主張したのである。戦国時代を背景とした現実的な提言であったと言える。

ただ、そもそも二つあるものを原理と言えるのか、という疑問が生じたであろう。また、「文」「武」の併存といっても、それらはどのように使い分けるのか。それらを統括する真の原理がさらに追究されたであろう。

そこで登場したのが、馬王堆帛書『称』に見られたような「天道」の理論である。世界に四季があり、春夏秋冬が循環しているように、文武も天道の下に同等の価値を持ち、天道の推移に従ってその強弱が増減すると説いたのである。文献名の「称」とは、バランスの意味であると理解される。儒家が説くような理想としての「文」と戦国の現実を踏まえた「武」とを天道のもとにバランス良く配置しようとしたのである。

そして、こうした理論に大いに触発されたと推測されるのが、漢代の董仲舒の思想である。その著とされる『春秋繁露』には陽尊陰卑篇がある。この篇名が象徴するように、董仲舒は、天道と人為の関係を次のように整理した。天には陰陽の二気があり、世界を構成する不可欠の要素であるが、春夏が温かく秋冬が冷たいように、どちらかと言えば、陽が尊く陰が卑しいという上下関係で併存している。これを人事に当てはめると、陽が「文」「徳」、陰が「武」「刑」に該当する。そして、陽―文―徳こそが、基本的で通常時に取られるべき「経」で、陰―武―刑は、臨機応変に繰り出す「権」

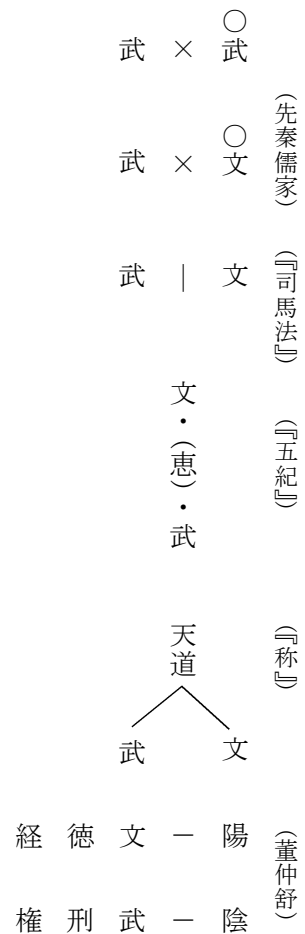
であるとしたのである。これにより、先秦の儒家が否定していた「武」も天道の理として「文」の下にその存在を認められたのである。

こうした董仲舒の思想は、先秦儒家の文武観から見ると相当の飛躍がある。従来は、馬王堆帛書『称』のような理論が知られていなかったもので、中国思想史において、孔子や孟子の時代に見られたような素朴な文武観がなぜ董仲舒のような高度な思想に発展したのかは大きな謎となっていた。その両者の間に『称』のような思想的展開があったとすれば、董仲舒の思想形成も比較的容易に理解されるのである。

加えて、清華簡『五紀』もその間隙を埋めてくれる思想になる。『五紀』は、黄帝が蚩尤を誅殺した後、さらに武力によって世界を制覇し、最終的には、「文」「恵」「武」の「三徳」によって世界の安定をもたらしたと記している。ここに天命や天道の思想は見られないが、「武」を現実のものとして受け止め、それを「文」の下に滑り込ませることによって、価値を認めようとしている。

当時の『五紀』の読者がこれをどう受け止めたかは分からないが、見方によっては、やや唐突な理屈だとも言えよう。なぜなら、蚩尤を誅殺した黄帝自身には、「文」や「恵」の要素はほとんど見られないからである。黄帝は武力によって勝利したのであり、その文徳に蚩尤がひれ伏したわけではない。ただ『五紀』が「勝てば官軍」的な王権論を説かず、このような「三徳」を提示したのは、中国の文武観の展開という観点からも大いに注目される。「中国的文武観の展開モデル」の中では、『司馬法』と『称』の間に位置づけることができよう。『称』に加えて『五紀』のような文武観が当時あったとすれば、それも漢代以降の中国的文武観の形成に一定の役割を果たしたと推測される。

【図3】 中国的文武観の展開モデル



最後に、やや余談的にはなるが、「洪水」について言及しておこう。

『五紀』の冒頭では、そもそも洪水があつて后帝がこれを治めたと言き起こされている。つまり、后帝以前にも世界はあり、洪水によって一旦混沌となった後、改めて世界の秩序「五紀」が整えられたという構造になっているのである。これは、完全な「無」から天地万物人間が誕生するという宇宙創成神話ではなく、旧世界から新世界への更新を説いていると言える。

洪水神話は世界各地に分布しており、従前の雑多な世界を一旦リセットし、その後、唯一の正統によって新世界が始まると説明する重要な役割を果たしている。また洪水の発生は、人間の悪事に対する神の怒りであり、正しい人間のみがそれを免れるなどの倫理的観点を含む場合がある。ノアの箱舟伝説はその代表であろう。

ただ、中国の洪水伝承は、夏王朝の創始者禹の治水伝説に見られるとおり、洪水自体よりも「治水」の側に力点が置かれ、しかも洪水の発生に倫理的観点を含んでいない点にも特色がある。この点は『五紀』も同様であり、この意味においては中国的な伝承であると言える。

なお、世界の創世を洪水から語るのには、男性的な創造神話で、家父長的な神話だという指摘もあるが(注9)、この『五紀』については未詳である。

結語

以上、本稿では、新たに公開された清華簡『五紀』を取り上げ、そこに見られる黄帝・蚩尤伝承の特質について考察してきた。

『五紀』は、黄帝・蚩尤伝承の研究に新たな知見をもたらしたと言える。また、この伝承を中国思想史の展開、特に古代思想史の重要課題であった王権の由来と正当性という観点から俯瞰してみると、中国の文武観の展開の上で重要な位置にあったことも明らかになった。さらに、これまでほとんど注目されなかった『史記』表の記載についても、改めてその資料的価値が認識されるとともに、なぜそうした系統の伝承が亡んでいったのかについても、一つの仮説を提示することができた。

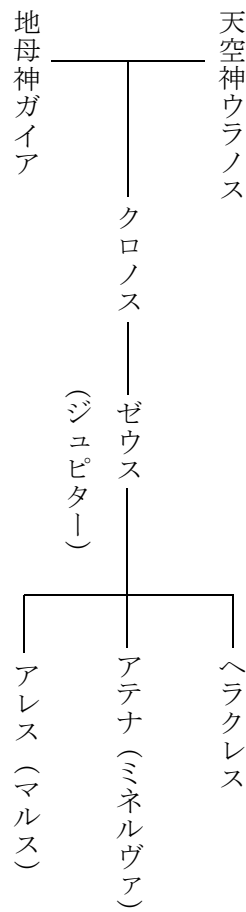
清華簡『五紀』では、黄帝・蚩尤が親子と明記されていた。子が親に反発し、親はその子を誅殺するという、ある意味では非中国的な構造となっていたのである。

こうした「親子の相克」については、ギリシア神話にも類似の伝承が見られる。例えば、アポロドーロス『ギリシア神話』では、世界の創始が次のように説明されている。

全世界を最初に支配していた天空神ウラノスと地母神ガイアからクロノスが生まれた。後にクロノスは父ウラノスを追放するが、その際、ウラノスとガイアは、クロノスに向かって「お前自身の子によって支配権を奪われるだろう」と予言した。クロノスは予言を避けるため、次々と我が子を殺して行くが、六番目の子ゼウスは死を免れた。成人に達したゼウスは十

年に及ぶ戦争により、ついに父のクロノスを討って追放し、ここに全知全能の神ゼウス率いるオリンポスの神々の時代が始まった。ゼウスの子の一人が、十二の難業を克服したことで知られるギリシア神話最大の英雄ヘラクレスであった。

また、ゼウスと妻メティスの娘が、学芸の女神アテナであるが、ゼウスは、「メティスから生まれる男子は父の王座を奪うだろう」との予言におびえて妊娠中の妻をのみ込んだものの、ゼウスの額から成人して武装した姿でアテナが飛び出したとされる。



このように、ギリシア神話においては、親子の相克は重要なモチーフとなっており、さらに子が親に反発し、親を追放したり殺したりすることによって世代交代が進んで行くという基本構造になっている。『五紀』も同様に子が親に反発するのであるが、逆に親によって誅殺されるというのは大きな相違点である。

また、ギリシア神話の軍神アレスはゼウスの子の一人で、戦闘時の狂乱を神格化した荒ぶる神だとされる。ローマ神話でこれと同一神とされるマルスは、人間に豊かさを与えてくれる戦いと農耕の神となり、神格はやや変容した。

こうした変容は、中国の戦争神の展開にも類似していると言えよう。中

国における戦争神は、荒ぶる異形神「蚩尤」から、王に忠誠を尽くす武神「太公望」「関羽」へと変質した(注10)。清華簡『五紀』でも、蚩尤の荒ぶる性格は稀薄である。「文」の下位に「武」を位置づけようとした中国の文武観からして、それは蚩尤が辿り行く必然の帰結であったとも言えよう。

注

- (1) 竹簡背面の劃痕の状況については、『清華大学蔵戦国竹簡(拾壹)』上冊所収「原大図版」の各竹簡背面写真参照。
- (2) 竹簡の各種符号については、拙著『竹簡学—中国古代思想の探究—』(大阪大学出版会、二〇一四年)参照。
- (3) 「稱攘以圖」について「補正」は、「称量以圖」と読む。また、「后帝靖己」について「后帝省己」と読む。いずれも意味に大差はないが、一説として評価できる。
- (4) 「五紀」について「補正」は、原釈文の原注が『書経』洪範の「一曰歳、二曰月、三曰日、四曰星辰、五曰曆數」を参考として提示していることに対して、本来「五紀」の細目は、この清華簡『五紀』のように「日、月、星、辰、歳」の五つであり、洪範の「五紀」もはじめはこの五つを指していた可能性があるとする。
- (5) 「唯后之正民之徳」については原釈文のままとしたが、「補正」は「唯后之政、民之徳」と読み、伝世文献でも王の政治と民の徳とを対比するものがあると指摘する。確かに、「仁義愛仁忠」の五徳は為政者・民双方に求められているであろうから、その修正案にも説得力がある。
- (6) 「天地疾瘟」について、「補正」は「天地疾瘟」に読み、「疾疫」の意であるとす。

- (7) 郭店楚簡『唐虞之道』は、禪讓を唯一の王位継承形態とした上で、古代聖王の内、禪讓され、また禪讓した王として舜を絶賛する。また、北京大学蔵漢簡『周訓』は、殷の湯王の故事を引きながら、周の王位継承者とされた太子に向かつて、長子相続が絶対ではなく不善があれば廢位すると説く厳しい訓戒の内容となっている。この点については、拙著『中国の世界遺産を旅する』（中公新書ラクレ、二〇一八年）第一章参照。

(8) 中国的文武觀の詳細については、拙著『戦いの神』第二部参照。

- (9) 遠藤庄治「環フィリピン海地域における津波伝承の比較研究」（サントリー文化財団研究助成成果報告、二〇〇五年度）は、アメリカの民俗学者ダンデスの見解として、洪水神話は家父長的なイデオロギーを象徴した創造神話であるとす。ただ一方で、アジアの洪水神話では洪水を起こすのは必ずしも男神ではなく、また生き残るのは女性のケースが多いとも指摘する。

(10) この点については、拙著『戦いの神』第一部参照。

【参考文献】

『文物』所収

- ・馬楠「清華簡《五紀》篇初識」（『文物』二〇二一年第九期、二〇二一年九月二十五日）
- ・石小力「清華簡《五紀》中の二十八宿初探」（同）
- ・賈連翔「清華簡《五紀》中の“行象”之則與“天人”關係」（同）
- ・程浩「清華簡《五紀》中の黄帝故事」（同）

清華大学出土文献研究与保護中心ホームページ

- ・清華大学出土文献讀書会（劉曉晗整理）「清華簡第十二輯整理報告補正」（二〇二一年十二月十六日）

・袁金平「清華簡《五紀》“眉”字補釋」（十二月十九日）

復旦大学出土文献与古文字研究中心ホームページ

- ・鄔可晶「釋清華簡《五紀》的“介”」（十一月十八日）
- ・劉釗・李聰「清華簡《五紀》訓釋雜說」（十二月八日）
- ・抱小「讀《五紀》小札一則」（十二月二十三日）
- ・抱小「《五紀》校勘札記一則」（十二月二十四日）
- ・王寧「清華簡《五紀》簡一〇四—一〇七部分文字釋讀」（十二月二十六日）
- ・抱小「讀《五紀》小札一則」（十二月三十日）
- ・王鵬遠・陳哲「清華簡《五紀》讀札」（十二月三十一日）
- ・王寧「說清華簡《五紀》中用爲“尾”、“衍”之字」（二〇二二年一月三日）
- ・張雨絲・林志鵬「清華簡《五紀》“四尤”小議」（二月七日）
- ・尚賢「說清華簡《五紀》中關於占卜的一段話」（二月十二日）
- ・王寧「清華簡《五紀》“穢（眉）”字獻疑—兼解北大漢簡《妄稽》之“蟻黎映管”」（二月二十四日）

武漢大学簡帛網ホームページ

- ・羅小華「《五紀》小札」（二〇二二年十一月十六日）
- ・羅小華「清華簡《五紀》雜識」（十二月十六日）

【附記】

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究B「戦国秦漢簡牘の総合的研究—安大簡・清華簡・上博簡・北大簡を中心として—」（19H01193、二〇一九〜二〇二二年）（研究代表者湯淺邦弘）による研究成果の一部である。

湯浅 邦弘（ゆあさ・くにひろ）

一九五七年生まれ。大阪大学大学院人文学研究科教授。専門は中国思想史。本稿に直接関わる著書に『戦いの神―中国古代兵学の展開―』（研文出版、二〇〇七年）、新出土文献に関する著書に、『竹簡学―中国古代思想の探究―』（大阪大学出版会、二〇一四年）、編著に『清華簡研究』（汲古書院、二〇一七年）など。最新刊に、明治時代の漢学者西村天囚の世界一周旅行をたどった『世界は縮まれり―西村天囚『欧米遊覧記』を読む―』（KADOKAWA、二〇二二年）がある。